
キツネ物語り

雪柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キツネ物語り

【Nコード】

N3132BA

【作者名】

雪柳

【あらすじ】

なぜだか分からないけど寝て気が付いたら不思議なところに居ました。

そこで会ったのは一匹の白い猫。

そしてその猫に此処で会ったのも何かの縁 ということだけで1つだけ願いを叶えてもらえることに。

何かと至らないところもあるかと思いますが、

これからよろしく願います！

まさかの展開（前書き）

それまでは至って普通の毎日でした……。

まさかの展開

ボスン！

音をたてて飛び込んだ先は部屋のベッドの上。

うつ伏せの状態から転がって仰向けになった私の手には、ある一冊の本が握られていた。

その本の題名は

『幽遊白書』。

たまたまそれを本屋で見かけて、

小さい頃一度だけ読んだ事を思い出した。

何となく気になりながら、懐かしいな。

だなんて思っ手取ったのは今から思えば大体一ヶ月、いや、二〜三ヶ月くらい前。

すっかり気に入って、

気が付いた時にはキャラの台詞まで覚える程になっていた。当然内容も全て覚えていけるわけ。

「まさかここまでではまるとは思わなかったな…。」

そう一言呟いてベッドの上で広げていた腕を顔の前まで持ち上げる。

そして真っ先に視界に入っ来て来た人物を見て、

ふっ と目元が緩むのを感じながら

そっとページをめくった。

「……蔵馬……」

気が付くと口をついて出て来るその名前は、
私がこの本を好きになってのめり込むきっかけを作った張本人で、
私が好きになった人だ。

「会いたいな…。」

彼の事を好きになって、
ネットで彼らの世界に行く小説を読むようになって、
私の口からこんな言葉が出て来る事も多くなった気がする。

「…………寝よっかな…。」

小説みたいに会えなくても、
夢の中だったら…………、
自由、だもん…ね…………。

そして、

不思議な夢をみました。

気が付いた時、私は真っ白な世界に1人で立っていた。

右も左も真っ白。

どこを見てもただただ白いだけでなんにも無くって…。

「なに、此処…。」

もしかして、夢？」

っていうか

そうだとしか考えられない。

だって、

さっきまで私は自分の部屋で寝てた筈なんだから。

それがいきなりこんな所に出るなんて……。

「うん、おかしい。

やっぱりこれは夢だわ。」

そう思って頷いた、

その時だった。

「うん、確かに夢だね。」

「!？」

誰!!誰か居るの!？」

びっくりして飛び上がるどころだった…。

そりゃそうだと思う。

だって誰もいないと思っていなかったところ、
しかも後ろからいきなり声を掛けられたんだから。

「あはは。

驚かしてごめんね。

びっくりしたでしょ？」

本当にいつの間に見れたのか。

そこにいたのは一匹の白い猫だった。

「…え、…ね、ねこ……？」

びっくりしすぎて

我ながらなんとも間抜けな声を出していると、

私の後ろに座っていたその猫は、まるでイタズラが成功した子どものような顔をして笑っていた。

あ、かわいい。

っていうか凄じ、喋った。

「花川かよちゃん…だよね。」

えっ!!

「な、なんで私の名前…」知ってるの!?

と続くはずだった私の言葉。

だけどそれは目の前の白猫のこのセリフに遮られてしまった。

「此処は君の夢の中ではあるけれど、

同時に僕の領域でもあるからね…。」

だから、此処にいる君の事はなんだって分かる。」

「そ、うなんだ…。」

「うん。」

なんだかいやに神妙な顔をして話すもんだからつい黙って聞いてたけど…、

……なんか今、さらっととんでもない事を言われた気がする…。

あれ？

気のせい…？

「気のせいだよつと！」

ビヨンツ！

「うわっ…！」

そう言っつてその猫は突然勢いよく私の肩に飛び乗ってきた。

「あ、危な…！」

「あ、上手いね。」

やっぱり猫好きなだけあるな。

もっと驚くかと思っただのに…。」

いきなりきた肩への重量感と小さな足の感覚に少なからずびっくりしてると、

そんな私の反応を見て、この猫はおかしそうに笑った。

「なんで君が此処に来れたのかは分からないけど、
此処で君と会えたのもきつと何かの縁だ。
だから…、」

トッ！

「僕が君の願いを叶えてあげるよ。
ここなら、僕はなんでも出来る…。」

肩から降りた猫は、
そう言つて不敵に笑つた。

「…君は、
一体、なんなの…？」

「僕に名前は無い。
でも、時々君みたいに此処に迷い込んで来る人間は、僕のことをこ
う呼んでいる。『次元の守り人』
とね…。」

「次元の…守り人…」

私は思わず呟いた。
瞬間、なんだかスウツと
身体が軽くなるのを感じた。

「えっ、ちよつとなに!？」

「…そろそろ時間みたいだね。」

「え…、時間って、」

「あつちに戻つたら此処に来る前に君が持っていた物を開いてみるといいよ。」

でも、

此処であつた事を信じるか信じないかは君次第。だって、これは夢だからね…。」

どんどん身体が軽くなっていく。

またね…。

その言葉を最後に、

私の意識は再び薄れていった…。

…

…

…

…

…

「……………」。

気が付くと、

私は自分のベッドの上にあった。

起き上がったって部屋の中を見回してみても、

あのさっきまで私が見ていた白い空間は何処にも無い。

部屋は真っ暗で、

携帯を開いて見た時計は真夜中の時間を指していた。

やっぱり、あれはただの夢だったのかな…。

それにしてもリアルな夢だった。

今でもあの空間で、

あの白い猫の言葉や肩に飛び乗ってきた時の感触が残っているような気がする。

あつちに戻ったら、

此処に来る前に君が持っていた物を開いてみるといいよ。

「……………」

手に取ったのは、

私が寝る前に読んでいた あの一冊の本。

此処で会えたのも何かの縁だ。

だから、

僕が君の願いを叶えてあげるよ。

此処なら、
僕はなんでも出来る…。

…私の願い、か…。

信じるか信じないかは君次第。
だって、
これは夢だからね…。

ハラリ…

開いた本から出てきたのは、
一枚の真っ白い紙だった。

カサ…

何も挟んでいなかったはずの幽遊白書の本から出てきたその紙は、
真っ暗な部屋の中で、何故かほんのり光っているようにも見えた。

まだ夢を見ているかのような感覚の中、
私はその紙を再び本に挟んで
もう一度布団の中に潜る事にした。

この時、
私はまだ知らなかった。

あの一見何のへんてつもな一枚の紙が、
これからの私の運命を
大きく変える事になるだなんて……。

つづく

まさかの展開（後書き）

ありがとうございました！

何か感想やアドバイスをもらえると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3132ba/>

キツネ物語り

2012年1月8日02時48分発行